



女兒と地藏菩薩像（六地藏尊灯籠塔）

震宝館だより

霊宝館だより 第83号

平成19年5月25日発行

和歌山県伊都郡高野町高野山306

(財)高野山文化財保存会

高野山霊宝館

電話0736-56-2029

<http://www.reihokan.or.jp>

春期企画展

「染織の美」

7月8日（日）まで

■同時特別陳列開催中

開催中 6月3日（日）まで
 「空海マンダラ
 弘法大師と高野山」展

- 北海道立近代美術館にて
- 国宝18点、重要文化財56点を
含む総計100点を大公開

企画展

「染織の美―天野社と舞楽装束―」

4月28日(土) ～ 7月8日(日)



薔薇文様 刺繍(表)



薔薇に反橋文様水干



薔薇文様 刺繍(裏)



薔薇に反橋文様括袴

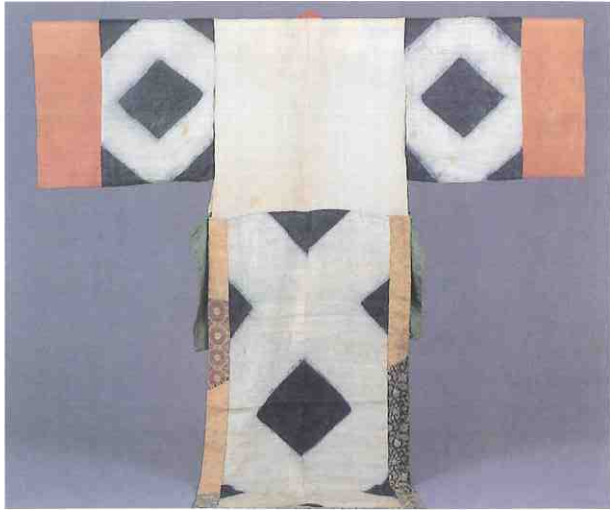
高野山のふもと、天野の盆地にある天野社(丹生都比売神社)は、古くより丹生・高野両明神を祀り(後の鎌倉時代、行勝上人真俊が氣比・巖島両明神を勧請し四柱を祀ることとなる)、高野山と密接な関係にありました。この天野社では、高野山興隆に尽力した行勝上人が、仁和寺第十七世道法親王より賜った宋版一切経を社頭の経蔵へ奉納し、その供養のため承元三年(一一〇九)より中世を通して一切経会が行われるようになりました。

以後、この一切経会が高野山検行の命により、金剛峯寺の行事として執り行われることとなります。その法会において、僧侶達の読経とともに神前で舞楽が奉納されてきました。舞楽とは、唐楽を伴奏とする左舞と、高麗楽を伴奏とする右舞、すなわち舞を伴う雅楽を指します。

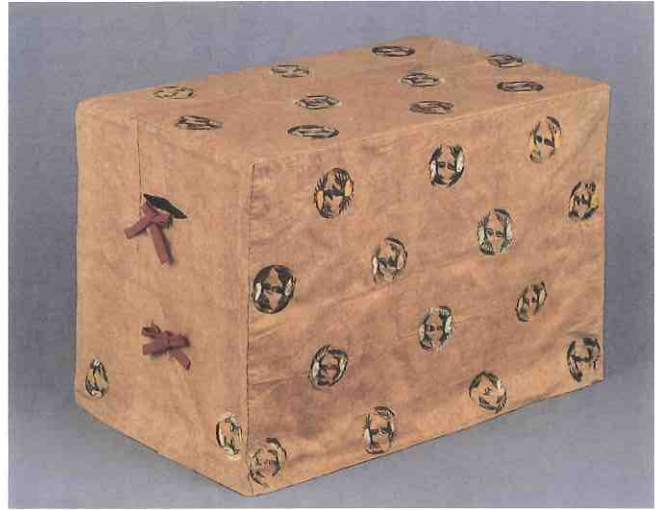
今回の企画展では、この天野社一切経会に際し行われた舞楽に用いられた装束を中心に二〇点余りを一挙公開致します。

これらは、各時代の遺例が少ない中、舞楽装束の展開を伺う上で重要な事例であることはもちろんのこと、日本染織史上数少ない基本資料としても大変貴重なものといえます。天野社の舞楽が地方芸能の域にとどまらず、当時の工芸の粋を集めた質の高いものであったことがうかがい知れるのではないのでしょうか。

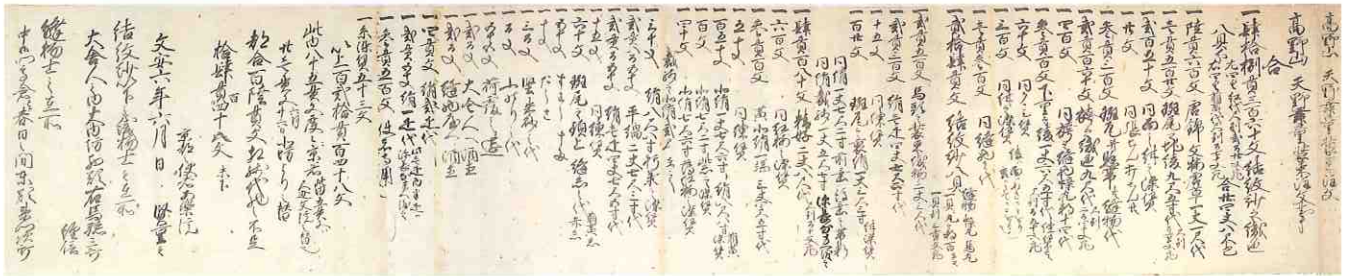
当時、最先端の美的感覚と技を駆使した荘厳華麗な天野社一切経会の様を楽しんでいただければ幸いです。



菱文様下襲



牡丹唐草に向鳥丸文様唐櫃覆



高野山天野舞童装束注文

◆主な出陳リスト

国宝

- ・高野山天野舞童装束注文 室町時代 金剛峯寺
- ・天野社一切経会料所置文案 室町時代 金剛峯寺
- (又続宝簡集卷二九)

重要文化財

- ・文様袍 室町時代 金剛峯寺
- ・蛮絵袍 室町時代 金剛峯寺
- ・蛮絵袍 室町時代 金剛峯寺
- ・菱文様下襲 室町時代 金剛峯寺
- ・薔薇に反橋文様水干 室町時代 金剛峯寺
- ・薔薇に反橋文様括袴 室町時代 金剛峯寺
- ・半臂 室町時代 金剛峯寺
- ・州浜に牡丹文様括袴像 室町時代 金剛峯寺

未指定

- ・天野社絵図 江戸時代 金剛峯寺
- ・弘法大師四社明神像 南北朝時代 金剛峯寺
- ・天野社舞楽曼荼羅供莊嚴図 江戸時代 金剛峯寺
- ・弘法大師・丹生高野阿明神像 江戸時代 宝寿院
- ・牡丹唐草に向蝶丸文様前掛 室町時代 金剛峯寺
- ・牡丹唐草に向鳥丸文様唐櫃覆 室町時代 金剛峯寺
- ・梅椿唐草文様裂 室町時代 金剛峯寺
- ・藤山吹文様裂 室町時代 金剛峯寺
- ・菱に宝相華蝶文様裂 室町時代 金剛峯寺
- ・牡丹唐草に向鳥丸文様裂 室町時代 金剛峯寺
- ・花輪違い文様撰腰 室町時代 金剛峯寺
- ・向蝶丸文様前掛 室町時代 金剛峯寺
- ・妙法蓮華経方便品第二 (天野社奉納経二六卷のうち) 室町時代 金剛峯寺

特別陳列

高野山の印刷文化

高野山では鎌倉時代から明治時代まで、高野版と称される木版印刷事業が間断なく行われました。約六世紀のあいだ継続され開版された高野版の印刷事業は、日本の印刷文化を語る上でかかせないものとの高い評価を得ています。

今回の特別陳列では、高野版の長い歴史の中で制作された木版印刷用の版木や、その版木によって印刷されたものなどを公開しています。これらの木版印刷に関わる遺物から、高野山は単なる霊場としての機能ばかりではなく、日本文化発信地の機能を有した拠点でもあった、という歴史の一端を感じて頂ければ幸いです。

◆主な出陳品

重文

- ・高野版 大日経疏卷第二十巻頭板木
- 鎌倉時代 金剛三昧院蔵
- ・高野版秘蔵寶鑰 卷上 卷末板木
- 鎌倉時代 金剛三昧院蔵

未指定

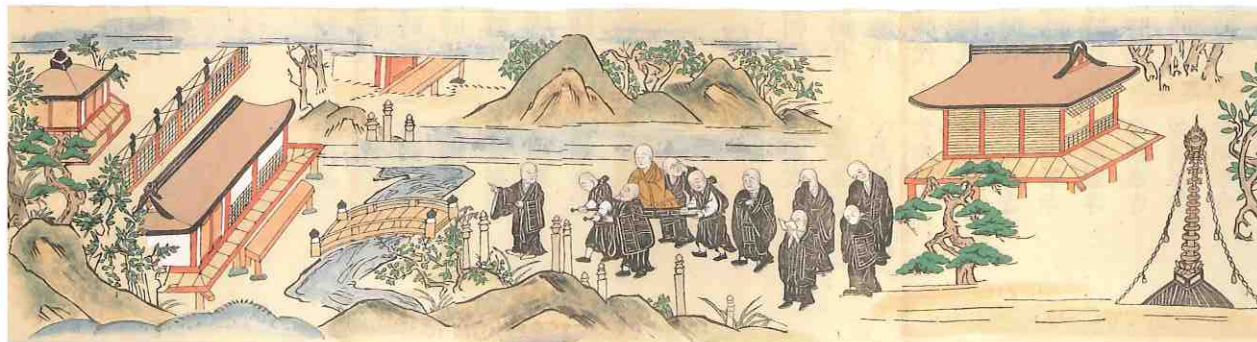
- ・高野版 高野大師行状図画巻第三板木
- 桃山時代 金剛峯寺蔵
- ・高野版 大日経のうち二巻 第一巻頭 第二巻末
- 弘安二年六月二十七日 権少僧都能海書刊記
- 鎌倉時代 宝寿院蔵
- ・高野版大日経疏 卷第二十 巻末
- 卷第二十 巻末
- 弘安二年安達泰盛刊記
- 鎌倉時代 宝寿院蔵
- ・版本 高野大師行状図画巻第三
- 江戸時代 宝寿院蔵
- ・木活字版 光明真言疏
- 慶長九年十月二十一日刊記
- 宝寿院蔵

和歌山県指定文化財

- ・高野版木製活字
- 桃山時代 西禅院蔵



巻第三



巻第九

高野大師行状図画（江戸時代 宝寿院蔵）

収蔵品の紹介 57

重要文化財

薄紅地松梅文様水干 括袴

絹製（水干） 前丈85cm・衿79cm
（袴） 丈85cm

金剛峯寺蔵



薄紅地松梅文様水干



薄紅地松梅文様括袴

盤領^{あびくひ}、広袖で、身は一幅、袖は幅広の一幅（織幅六五センチ）を用いて奥袖に端袖を縫いつけたように見せかけた施工である。

地質は、水干・袴ともに表地が紅染の平絹（退色して黄色に見える）、裏地は薄黄（もとは紅か）の袖様平絹を用いた袷仕立てで、また袖口には、絹製萌葱の括緒を通す。

文様は、前身頃胸部分に梅の折枝、裾部分には沢瀉と藻を表し、後身上部と袖に州浜に松と梅の木を、裾に

は梅の折枝が刺繍され、同じく袴にも松と梅が州浜に生い立つ様子が前後にすべて刺繍で表わされている。室町時代の竹が加わらない松梅の古様は、素朴な美しさを感じさせる吉祥文である。

これら水干・袴に施された刺繍は、紅・紫・白・萌葱濃淡・黄・茶濃淡・浅葱といった多様な色彩の燃りをかけない太い平糸が用いられ、裂の裏面に糸をほとんど回さない「渡し繡（平繡の一種）」を多様し、

ふんわりとしたやさしい表情を見せている。これらの自由でおおらかな表現技法は後の桃山時代の絢爛な繡^{かひ}箔へと受け継がれていくのである。

また、袴の腰裏に「左後頭 天野一切経会試楽 享徳三年 甲戌三月 日」との墨書銘があり、舞童による試楽装束であったことがわかる。今回展示の「薄紅地薔薇反橋文様水干・括袴」も同じ形式のものである。

（本品は今回、展示しておりません）

（0）

連載

高野山の名鐘

其の6

宝幢院鐘

霊宝館副館長 井筒 信隆



宝寿院楼門の名鐘

現在、高野山僧侶養成機関として設置されている専修学院（宝寿院）の山門に掛かっている釣鐘は、その銘文から宝幢院に施入されたものであることが判明する。また、この釣り鐘は江戸時代の記録である『紀伊統風土記』によると、蓮華谷阿弥陀堂の鐘楼に掛かっていたと坪井良平氏は『高野山の梵鐘』において紹介されている。

宝幢院の寺院名については、『紀伊統風土記』に伝えるところによると、「開基足利上総介義兼入道法華房鏝阿上人が宝幢三昧院を創造す。」と記している。同院の開基と伝える法華房鏝阿上人は、室町幕府を開いた足利尊氏から六代前の足利義兼が出家入道後に名のつた僧名で、足利入道鏝阿などとも呼ばれる。この鏝阿上人は高野山にとって、大きな勸進活動をおこなったことでも知られて

寛永時代に活躍した 鑄工の藤原国宝

いる。

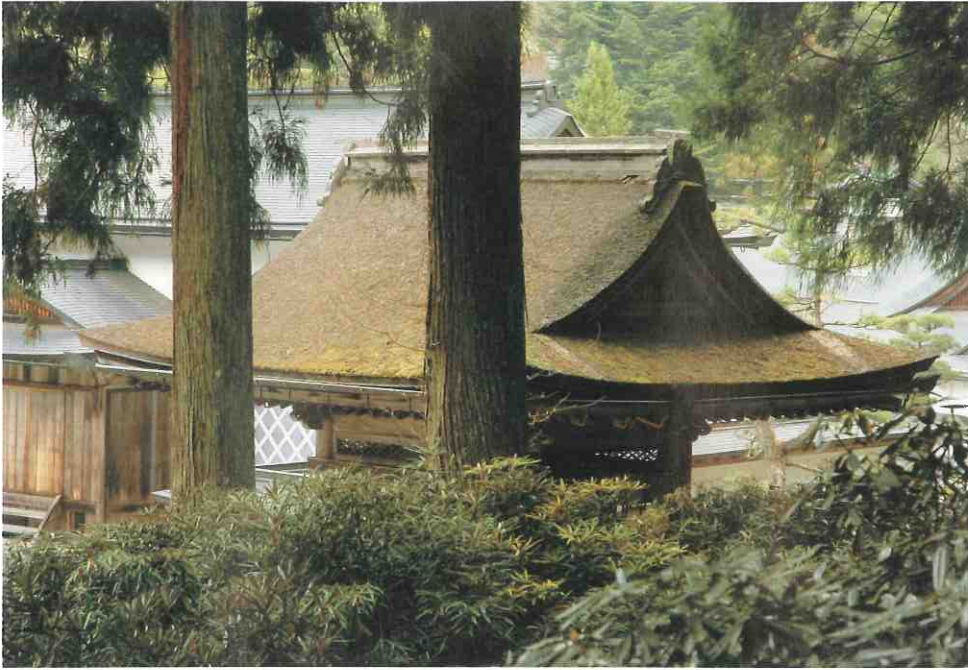
鏝阿上人の高野山における勸進活動で最も有名なものに、平家没官領であった備後国大田庄を後白河上皇と交渉して、伽藍大塔で行う平家の怨霊供養の大法料として



専修学院（宝寿院）楼門外観

寄進させたことがある。また、鏝
 阿上人は、山麓天野社に対して和
 泉国近木庄を寄進して、法華八講
 を興して、社頭の精舎に源平の争
 乱で夫を失い、未亡人となった人
 で、密教信仰の志のある無縁尼六
 十人を無償で養い住まわせて、六
 時念仏や転経を勧めて亡き人の菩

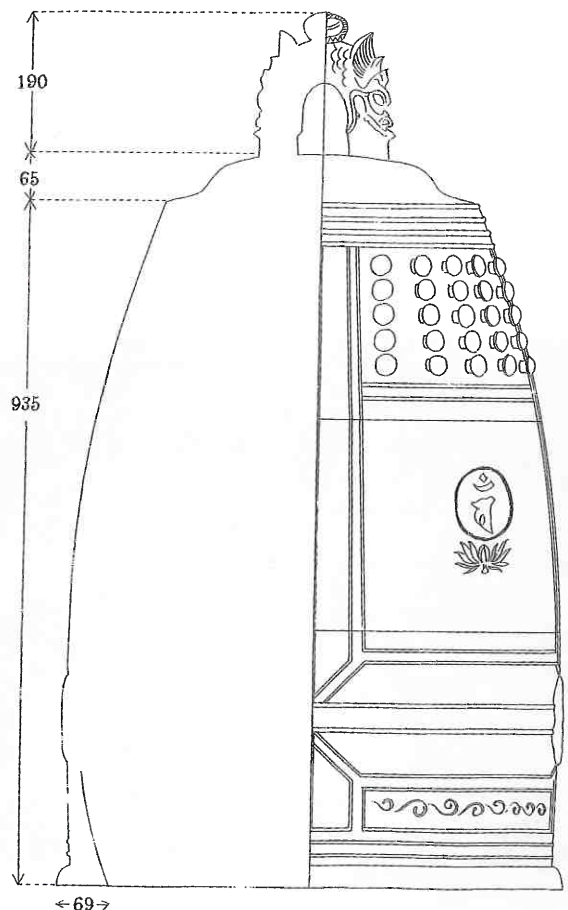
提を申わせるなど社会福祉活動に
 も取り組んでいる。
 鏝阿上人が宝幢三昧院を創建
 後、同院は『紀伊統風土記』によ
 ると「二位尼公（源頼朝の妻北条
 正子）が修繕した時には塔があつ
 たが、蓮華谷で火災があつて類焼
 の後は、阿弥陀堂のみが再興され



宝寿院の鐘楼門 昭和3年5月28日上棟式を挙行し、同年に完成しました。
 門の柱には、昭和元年12月に焼失した伽藍金堂の焼柱を再利用して建てられています。

た。以来、宝幢三昧院の三昧の二
 文字を除いて、谷の名前（宝幢院
 谷）を遺すという」と記している。
 この鐘には、元和六年（一六二
 ○）に伊勢の鈴鹿郡小岐須村の鈴
 木小右衛尉の三男で、宝幢院なら
 びに常慶院の先住職であった持円
 が寄進したことを伝える銘があ
 る。同鐘を製作した鐘工は藤原国
 宝である。鑄工の藤原国宝につい
 ては、坪井氏によると、慶長一五

年（一六一〇）に制作された兵庫
 県西宮市の西宮神社の鐘が初見
 で、寛永十七年（一六四〇）十一
 月に製作された京都嵯峨天竜寺の
 鐘を最後とする、前後三十年間に
 わたって活躍した鑄工である。
 また、寛永十三年の京都知恩院
 に制作された巨鐘の製作を請背う
 など名の通った鑄工であったこと
 を紹介されている。



霊宝館の梅



春は石楠花、秋はモミジの紅葉で有名な霊宝館の庭園に、高野山を代表する梅の名木があることはあまり知られていません。

この梅は、昭和四十一年十二月十日に大宝蔵周辺の庭園整備事業の一環として植えられたもので、記録には「美里一号」という品種三十本が植栽されたと記されています。現在ではそのうちの三本だけが残っていますが、その枝ぶりとは快な咲きつぷりは高野山を代表する梅の名木といえます。

四月の声を聞くと、梅のつぼみが日に日に膨らみ、中旬頃に満開を迎えます。今年は四月十日過ぎにすべての枝に可憐な花が咲き誇りました。

人知れず、吹雪のように咲く花をみると、止まった時間の中で梅の木と自分だけが残されたように感じられます。日だまりの中で白梅とともにたたくむと、なんともいえない穏やかな気持ちになるから不思議です。

高野山に流れる悠久の春風に微笑む白梅が花の終わりを告げると、桜の花が一斉に咲き誇る好季を迎えます。



六地藏尊灯籠塔とその作者 角田蘇風

高野山の奥之院は聖域とされる
 特異な空間で、杉の巨木と多くの
 墓石が林立することで知られてい
 ます。そんな奥之院に、青と白の
 コントラストも印象的な、まるで
 おとぎ話に出てくるキノコの家の
 ような建物があります。

建っている場所は、奥之院一の
 橋を渡って右手に伸びる石畳の先
 で、遠目にも異彩を放っているこ
 とから、初めて訪れる方でもすぐ
 に気付かれると思います。
 「六地藏尊灯籠塔」というのが
 建物の正式名で、なるほどその形
 は「灯籠」のようで、しかも高く
 そびえ立つといった意味の「塔」
 であることがわかります。
 灯籠形の六地藏塔と呼ばれるも
 のは、全国的にも少なからず存在
 しています。しかし本灯籠塔のよ
 うに、等身大の六地藏尊像とする
 のは珍しく、当時、日本一の高さ



六地藏尊灯籠塔（奥之院一の橋付近）
 落成奉納法要は昭和40年7月24日に執り行われました。
 蘇風さん66歳頃の作。



昭和39年基礎が完成した
 状態の灯籠塔。写っている
 のは草繫師と晃円尼。
 高野山時報より転載

を目指して建設されたというのも
 うなずけます。

灯籠塔の建設発起人は東京の野
 村晃円（一八九五〜一九七九）と
 いう尼僧さんで、弘法大師の夢告
 げを受けて発願したといい、全国
 を行脚し寄進を募っての建立だっ
 たと伝えていきます。当時、晃円さ
 んの発願に賛同した高野山三宝山
 草繫全弘師は灯籠塔建設委員長と
 なり、その建設用地として自坊の
 奥之院墓地を提供され、後に灯籠
 塔と共に金剛峯寺へと一括寄進さ
 れました。

完成は昭和三十九年（一九六四）
 十二月十六日で、高野山が開かれ
 て一一五〇年、さらに明治から数
 えて百年を記念しての建物ともな
 りました。

高野山での葬儀の場合、奥之院
 の墓所へと埋葬するに際して、担

いだ棺を逆に三匝（三回転）する
 習わしがあります。その場所は従
 来、一の橋を渡って右手に建つ関
 東大震災供養塔の付近であったと
 います。

六地藏尊は地獄など六道に墜ち
 た衆生（しじやう）を導くとされていま
 すので、六地藏尊灯籠塔が建立さ
 れてからは、灯籠塔前で三匝する
 ようになり、高野山での葬儀には
 欠かせない建物となりました。

しかし近年、明確には高野町に
 斎場が完成した平成六年以降、灯
 籠塔前で棺を回す光景を見ること
 は少なくなってしまうました。

六地藏尊灯籠塔の作風

六地藏尊灯籠塔の高さは台座を
 含めるとおよそ八・〇メートル、
 基本的な形は石灯籠のそれで、竿
 や中台、火袋、笠、宝珠といった
 部分で構成されています。竿にあ
 たる位置の周囲六面には、等身大
 で乳白色の六地藏尊を配し、その
 上部の火袋には飛天や水波、龍、
 鳳凰などがレリーフされています。
 てっぺんの宝珠は蓮台をかま
 え、宝珠自体には梵字が付けられ
 ています。

火袋部の天女像（六地藏尊灯籠塔）
やさしい表情が印象的です。

台座部の表面には、コンクリート面に拳大ほどの自然石を一面にはめ込み、その台座内部は空洞となっています。

構造は鉄骨コンクリート造りでモルタル仕上げとし、六地藏尊像などもモルタルの上に彩色が施されているものと思われま

す。塔全体を支配する作風は、形式にとられずきわめて独創的です。それでいて、女兒と地藏菩薩像（表紙写真）や飛天像などに見られる表情など、仏の慈悲心といったようなものをうまく表現しているのではないのでしょうか。

角田蘇風さんのこと

六地藏尊灯籠塔の作者が角田蘇

晩年の角田蘇風師
(1898~1977)

風という方であることは、灯籠塔の基台部に取り付けられている銘文によっても判明します。

「蘇風さんは和歌浦（和歌山市）に工房を構え、現代アートの走りでもある樹脂加工の作品を手がけて活動していた工芸作家でしたよ。ウチにも探せば数点作品が残っているかも知れないなあ」とは、紀ノ川市で陶芸材料店を営む楽誠社のご主人の話です。これは、蘇風さんについての手がかりをさがしていた時、偶然にも知り得た情報でした。しかし、それ以上の細かな情報は分からないとのこと。

残る手がかりといえば、他からの情報で、蘇風さんには陶芸家である弟さんが紀ノ川市近郊に住んでおられるらしいということでした。ただし名前も住所も分かりません。困っていると、「陶芸作家の松岡さんなら何か知っておられるのでは」と、楽誠社さんから新たな情報を頂きました。

さっそく松岡さんに連絡を入れ、蘇風さんについて調べていることを告げますと、「それはボクの兄です」との答えが返ってきたのです。これにはさすがに驚きま

した。僅かな情報でもあればと連絡したつもりが、その方ご自身が蘇風さんの実弟、松岡成典さん八十二歳だったのです。

「兄は短気で、私もよく叱られました」と成典さん。作品からだけでは分からない蘇風さんのひととなりを知ることができました。

蘇風さんは、明治三十一年（一八九八）七月一日花園村（現在のかつらぎ町花園）に生まれました。本名松岡長之助。松岡家の長男ながら角田家の養子となり、明治期の南画家である角田梅崖の後継者として、角田蘇風と名乗りました。松岡家は寺社などの鬼瓦を制作する瓦屋を営んでいたといえます。こうした家業が、蘇風さんたちご兄弟を、陶芸や工芸作家の道へと進ませる要因ともなったようです。

蘇風さんの作品紹介

和歌山城の伏虎像

和歌山城の大手門をくぐり石垣沿いにたどれば、ほどなく伏虎像の鎮座する場所へといたります。

どうして和歌山城に伏虎像があるのかといいますと、和歌山城周



伏虎像（和歌山城）蘇風さん61歳頃の作です。

辺を海上から見ると虎が伏している姿に似ているのだそうで、このことから和歌山城を「伏虎城」とも呼ぶようになりました。こうして、いつの頃からか城郭内には伏虎像が設けられていたらしいのですが、材質が銅製だったことにより、昭和十七年（一九四二）、金属類回収令によって供出されてしまったといえます。

現在の二代目伏虎像は、昭和三十三年（一九五八）、天守閣などの再建の翌年、蘇風さんによって制作されました。

風吹山弁財天院の大弁財天像他

和歌山の岩出市から大阪の泉佐



幸福地藏尊像（風吹弁財天院）
昭和45年12月24日開眼されました。



大弁財天像（風吹弁財天院）
昭和42年の開眼供養には、全国放送のテレビで日本一の大きさの弁財天として紹介されたといひます。高さは台座を含めて7.0m。
弁財天像の胸部には、近くの私有林で見つけた高さ15cmほどの弁財天像を納めていることが、拝殿に掲げられる風吹弁財天縁起に記されています。蘇風さん69歳頃の作です。



百度石（風吹弁財天院）
百度石の弁財天十六童子像部分



英霊殿の屋根上に祀られるのは上目使いのダルマさんの頭部でしょうか。でも、どうして頭部だけなのかは分かりません。（風吹弁財天院）



恵比寿像（風吹弁財天院）
えびす社の本尊です。昭和43年の造像。

野市へは、「泉佐野岩出線」と呼ばれる主要地方道が走っています。別名を「風吹峠」ともいいます。その岩出側の道路に面した一角に、風吹山弁財天院があります。現在、弁財天院周囲の山は削り取られ荒涼たる状況となり、さらに境内の両脇を道路に挟まれるといった、とても騒がしい環境にあります。そんな状況下の境内ですが、大弁財天像、えびす社、幸福



風吹弁財天院全景
通称、風吹峠へとさしかかる位置にあります。交通安全を願い、私財を投じて建てられました。

地蔵尊、英霊殿、立里荒神より勸請した荒神社などがぎっしりと祀

られています。本尊大弁財天像は、光明皇后をモデルとして造像されたといひ、当時、日本一の大きさであるといわれられました。昭和四十二年（一九六七）四月に開眼供養が行われ、以後、蘇風さんの代表作品ともなっています。その他、境内のえびす像、幸福地藏尊なども蘇風さん

の作品で、いずれもセメント造りであることが一貫しています。風吹山弁財天院は、地元在住の原田啓之助さんが私財を投じて創始されたもので、現在、ご子息の啓二さん八十四歳が護持されています。先に記した蘇風さんに実弟がおられるという情報は啓二さんによるものでした。

蘇風さんの作品としては、その他にも数点の大作もあるようなのですが、残念ながら、今回は確認を取ることができませんでした。蘇風さんの作風はなんといつても自由奔放なおもしろみがあり、それでいて真剣味があふれ出しています。さらに言うと、筆者などは、おどろおどろしくさえも感じってしまうのです。それは、未だ戦争の余韻を残した時代の、「生きる」エネルギーといったようなものが、作品にリアリズム（写実性）を与えているのではないかと、などと勝手な解釈を加えています。読者のみなさんは、どのようにお感じになるでしょうか。

最晩年期の蘇風さんは東京に住まいを移し、昭和五十二年（一九七七）に七十九歳で不帰の客となりました。

(M)

霊宝館販売グッズ紹介

新商品 根付け ¥500



- (上、右から)
- ・深沙大将立像
 - ・法華一品経提婆達多品
 - ・金剛力士
- (下、右から)
- ・制多伽童子
 - ・薄紅地舊微に反橋文様水干

新商品 レンティキラー (3D絵はがき) ¥300



八大童子立像のうち
阿耨達童子像



大日如来像



孔雀明王像

時事

【火災訓練】

3月5日、霊宝館では職員による火災訓練が行われた。敷地にある防災施設、消火器の使い方を確認し、迎賓館から出火を想定し本番同様の訓練が行われた。



【イスラエル大使来館】

3月29日、エリーエリヤフ・コーヘンイスラエル大使と随員のシュムリックバース参事官が霊宝館をご観覧され、霊宝館長、副館長が解説を行った。



【霊宝館敷地内工事】

霊宝館敷地内にある東屋と館内入口までのアプローチが改修工事され、冬期にはすべりやすく危険だった路面が改善された。



【書庫完成】

霊宝館役員室2階に書庫が完成した。以前は会議室だったが、迎賓館の改修工事が完了し書庫として利用されることとなった。



利用案内

開館時間 (平成18年度から次記のとおり変更されました)

- 5月1日～10月31日
8時30分～17時30分
- 11月1日～4月30日
8時30分～16時30分
- 休館日
年末年始のみ
- 拝観料
大人 600円
高・大学生 350円
小・中学生 250円